

痛い痛いのとんでいけ (その一)

燕木寿江

「給食を食べるようになって、おかわりもするようになったんですよ。『食べる』ということは大事なことです。人間味ができませんでしたよ」と、嬉しそうに、夕暮れの電車の中で向うから声をかけた、お母さんもK夫も太って色白の頬がほんのり紅かった。

S医科大学の「ことばの治療教室」からの紹介で、時々遊びにきていたが、一年就学を猶予して入園した五年前は言葉はすでに出ていたが、友達に興味はなく、勿論、「食べる」ことに関しては一定のものを除いては、殆んど関心がなかった、当時の日誌から抜粋してみよう。

——古切手蒐集のころ——

六月十二日

朝は古切手を集めることから始まるが、いくらか落ちて着いてきたように思う。今日も雨なのに自分から幼稚園に行くと言いだしたとか……。鉛筆は周りが一色のもの

だけがよくて、他のものは箱から出す。うちの染めものをはじめたら、「待てない」と言ってお母さんの膝の上に寝る。紺色・青色・水色の中で水色がいいと言う。二つ欲しいと言うので渡すと、五百欲しいと言う。「五百、無いのよ」と言うと、「疲れる、疲れる」と言っている。自分がどうしてよいかわからない時は、「疲れる」を連発する。お昼にならないうちに、ままごとのコーナーで牛乳を飲んで、ビスケットを食べる、K夫が食べることで何か満されるのか、誰も何も言わない。自分の遊びに夢中なのかもしれない。みんながお弁当の時は、積木で印刷屋さんを作って印刷機で刷ったという手紙をくれる。次に売屋さんになり、各部屋から、鞆、ぬいぐるみ、お人形を集めてきて、積木の囲いの中に入れる。「指人形をくださいな」というと、「三百円です」と言う。「はい、三百円」と言って手の平をたたくと満足する。紙芝居のときも傍で絵を描いて静かにしている。

六月十五日

「風邪気味なので、二、三日休みます」と電話があったが、走って部屋に飛び込んでくる。先生に逢いたくてきたのでもなく、友達と遊びたくてきたのでもない。ただ、切手に魅かれて各部屋を走りまわる。お母さんが齒が痛そうだったので、その間に帰っていた。午前中、初めて一人になる。別にお母さんを探すわけでもなく、集めてきた切手を分ける。「どうして二十円切手が多いの?」「記念切手は大きいのだよ」「四十五円切手を集めて」と話しながら、自分に必要な切手だけをよけてあとは机に乗ってばら撒く。友達がそれを拾って箱に入れると、また投げて箱も投げて喜ぶ。撒かれた切手をこんどはざるに入れていると、(友達はこの切手が大切なものであることをよく知っている)また、また切手を投げ、ざるを外に投げて喜ぶ。丹念に拾い集める友達もこの繰り返しで面白そうである。人とふれ合うきっかけになれば——と、そおつと思う。「蓋のあるものをちようだい」と言ったので、瓶をあげるとその中に切手を

入れて、コーナーの畳の上で横になってみている。久しぶりのお天気なので、「外にいかない？」と誘うが聞こえないらしい。本（グルンバのようちえん）を持ってきたので、だっこして読む。少し落ちて聞いていたが、膝から降りて一人で続きを読む。外でリズムをしている友達にレコードをかけていると、椅子の上に乗って

みていた。ボンと降りた時、レコードが止ったので、「静かに降りてね」というと、静かに降りた。「今度は何をかけるの？」と、一枚ずつ渡してくれた。まわっている間中、じっと見ている。牛乳をほんの少し服にこぼしてもそれが気になるのでとり替える。お弁当は全く食べない。グルンバのようちえんを各部屋から集めて本棚に並べておく。積木で公園をつくり、「入口から入ってここ本を読んで下さい」という。黒板ぶきをたたく棒を開閉に使って、出口から入ったら物凄く怒った。「先生だけ入って下さい」と言う。友達との関係はない。部屋の切手入れがいつも一定の場所にあることが、K夫にとっては安心なことで、プラスになると思っただけのままにし

ておいたが、どうしてよいかわからない。たまよちゃんが、「Kちゃん、お弁当食べられるようになりますとみんなと遊べるんだね」という。お母さんがいない方が要求したり、泣いたりすることがなく、なんだか静かな感じがする。

六月十九日

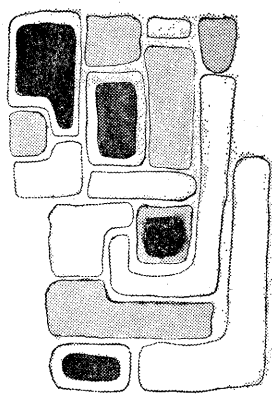
登園すると同時に切手集めを始める。みどり組は一枚しかなかったが、他の組で気に入ったのがあってよかった。「五百九十円は小包だよ」といって大事にする。椅子で四角に囲をつくり、金額毎に分け、十円、二十円、五十円はいやだといい、高価な切手、珍しい切手を喜ぶ。切手をその場におき、今度は絵本集めに奔走する。ブロックを入れる籠の中に本を入れて、それを三段に重ね、一番上に布団をかぶせる。きらいな本は持ってこない。友達が椅子を取ろうとして切手がバラバラになってしまったのを見つけ、泣いてさわいだ。「疲れちゃう」と言い、「暑い」と言っランニングとパンツになり、

先生の膝に眠る。K夫の館があるので机を出せずにいると、いい顔をして傍にきたので、「お引越して」というと、切手と本を動かす。「お手伝いしてね」というと、椅子を四つ持ってくる。ストローが欲しいというのであると、「ぬるい、ぬるい」といいながら牛乳を半分飲む。お弁当の玉子豆腐は冷えているのに食べない。ポテト風のはそいスナック菓子を、畳のところで寝そべってよく食べた。みんなのお弁当が始まると、隅の方でマジックでいつもの地図を書く。外へ出るきっかけをつくろうとしてもなかなかのってこなかったが、「先生と外へいかない？」と言うと飛んで外へ行って、みどり色のお茶碗にお水を汲んで手押車にあけた。「パンツじゃおかしからね」というとすぐズボンをはく。水汲みを続け車をひっぱって遊んでいたが、部屋に入り切手を水につけてはがしたいと言いだす。ネパールに送る話をしてもらわない。切手を持って帰ると言うので、ビニールの袋に入れると、「印刷してある使用済みの封筒でないといけない」と言うので、珍しいのだけ七、八枚入れてあ

げると、お母さんに抱かれて帰る。

六月二十日

「今日は幼稚園に行かないのかしら、と思っていたらさっさと出かけて行くので……」と、お母さんが言われる。十時半登園。いつも置いておく切手入れが定位置になくて、「しまった！」と思った。K夫も一瞬あわてて探していたがあきらめて他の組に行き、「気にいったのがあったよ」と言って喜んで戻ってくる。切手をしばらく



く見ていたが、おいたまま紙芝居の、「空の色はなぜ青い」を持ってきて、「これやって」と言う。丁度、貧血で具合が悪くなったS子の介抱で手が離されないうでいたため、(いつもは、やってということはすぐにしてあげているが)、「あとでね」というと、怒らないで、積木で「小さいお家をつくるの」と言いつくりだす。よしえちゃん、「何つくるの?」と聞くと、「何をつくるかわからない」と返事をした。初めて友達と会話が出来た。みんなが歌っていると、「どうして歌をうたうの?」と言う。「歌うと楽しいからよ、お隣のお友達の声も聞こえるでしょ」と答えると、それ以上はしつこく聞かなくなった。今までだと、「どうして、どうして」と混乱するまで聞いていたが、それがなかった。お迎えにきたお母さんの顔も心なしか明るい表情に見えた。

六月二十二日

九時十五分登園、「朝早くから幼稚園にいくといつて一人で着替えて、ひきとめるのに大変だった」とお母さ

んが言われる。今日は切手入れは部屋に置かないで様子を見ようと、先生方で申し合わせる。「切手どうしたの?」とすぐに聞く。「ネパールの可哀想なお友達に送ったの」と言うと、「どうして?」と聞く。「切手四百枚で一人分の注射ができるの」と話すと、聞いているのかわからないが、部屋中を見まわし無いと思つてか、溜めてある空箱を放り出し、足で蹴とばして歩いた。しばらくの間そうしている。そのうちに牛乳の空箱を三つ持ってきて放つては遊んでいた。二つずつ重ねてある椅子の脚の中に本を投げつけはじめた。「投げないでね」と言ったが、隣の組の本も持ってきて投げている。次に牛乳パックを投げ、本にあたるとその本をくれる、というゲームに発展した。本は勝手に取つてはいけない。自分が渡す人である、と言う。あたると「当り」と大きな声をだして本を渡す。数人の友達と三十分位、機嫌よくやっていた。それからマジックで紙に例の地図を書いていたが、あつという間に積木に、「ありがとうございます。50円」と書いてしまう。クレンザーをつけて雑巾で拭いて

いると、友達が一人ずつふえてきてハンカチをだして拭きだした。人が増えてくると、「ケラケラ」と笑い喜ぶ。「マジックは消えなくてお友達が困っているでしょう」と言うと、「消えると思ったよ」と言う。お弁当は、冷える食器に入っているとろろ天に青海苔をかけ、小さいビニールを口であけおつゆをかけておいしそうに食べる。ピ、ア、ハに写る友達を見ていたが、なんとなく淋しそうなので、「お家に帰る？」と聞くと、「お母さんが来ないから」と言うので電話をかけてお迎えにきて貰う。二時間半いたが、二時間がいいところだろう。ビュティフルネームの歌をうたっていたとき、「切手を送るネパールのお友達も幸せになるように、K夫ちゃんもお弁当が食べられて、みんなと遊べるようになるといいわね」と言ったら、駆けてきて、ぬいだブラウスで怒って私をたいた。はじめてのことであった。細い腕に怒りと力がかもっていた。なんということを言ってしまったのだから。「その子の成長を助ける」などと言いながら傷つけ、傲慢にも甚しい。あさましくも教育しようなどと大それ

たことを考えていたに違いない。これは欲深い驕りであり、許されないことだ。ごめんなさい。許して欲しい。反省しきりなり。

六月二十七日

登園すると同時に他の組へ行つて切手を持ってくる。「数えて」というので、「十五枚よ」というと、「あと一枚で十六枚だね」という。マジックで絵を描いているので、「これなあに」と聞くと、「きかないで」と言う。また、余計な質問をしてしまった。抱っこすると、赤ちゃんのようにべったりとくっついて頬ずりする。部屋で本のゲームのつづきをしてから、「にわとりと水」の本を読む。一対一だと落ちついて行動できる。ゆっくりとした気持の大人と、物のない静かな場所だったらやさしい表情になるような気がする。

(つづく)

(神奈川・市ヶ尾幼稚園)